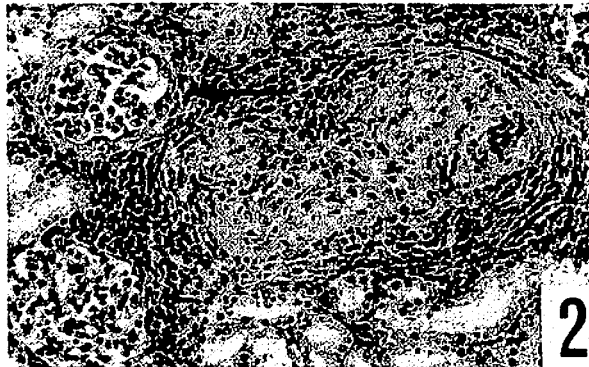


めん羊の腎臓

家畜衛生試験場北海道支場出題

第21回獣医病理学研修会標本No.349



動物：めん羊、コリデール種、♀、2才、北海道産。

臨床的事項：昭和53年春、北海道農業試験場で生産。

同年11月以後家畜衛生試験場北海道支場で飼育された。翌年9月から雄めん羊と共に放牧されたが、發育不良のため交配できなかった。11月に入り時々鼻出血を起こすようになり、11月28日に疝痛症状を示し食欲廃絶したため、同30日子後不良とみなし放血殺した。

肉眼所見：体格は小（体重、身長C・R・Lともに同年齢の正常めん羊の約 $\frac{1}{2}$ ）。鼻孔周囲に血液付着し、皮下脂肪の沈着は軽微。帯紅色透明腹水約2000ml貯溜。腎臓は左右とも中等度腫脹（約1.5倍）、断面では皮質中央部から移行層を通る白色糸状物が増生し、白線となって走る。皮質は混濁し三層境界は明瞭。肝臓はやや萎縮。小腸の上部は内容少なく著変なし。回盲弁部の上部50cmの部分が嵌頓し血腫状となり、これに接する回腸、結腸は漿膜面の線維素性癒着。嵌頓部以下の腸内容は少なく、縮小し、少数の寄生虫結節があるが粘膜面に著変なし。

組織学的所見：提出標本の腎臓を含め、大、小脳、骨髄を除くほぼ全身組織に中小動脈に動脈炎が見られた（図1：H-E染色×40）。腎臓では小葉動脈、弓状動脈、小葉間動脈および一部の小葉内動脈がおかされており動脈炎の型は汎動脈炎であった。ARKINの記した、線維芽細胞の増殖を主体とする肉芽組織期および、より陳旧な癒痕期の病変が種々の程度で内、中、外膜に存在した。

壁の肥厚の著しい動脈の管腔はしばしば著しく狭窄していた。これらの血管周囲には種々の程度でリンパ球、プラズマ細胞が浸潤しており、外膜から中膜に波及することもあった。動脈炎以外の腎臓の変化として限局性間質性腎炎とボーマン囊の線維性肥厚（図2：H-E染色×100矢印）が認められた。腎臓以外の諸組織の動脈炎もほぼ上記の如くであったが、鼻甲介粘膜下の小動脈に内～中膜のフィブリノイド変性があり、（図3：PTAH染色×100）、この鼻甲介と気管、心臓にはリンパ球と少しの好中球からなる外膜、中膜の細胞浸潤が認められた。動脈炎以外の病変として、回腸の嵌頓部の出血と壊死、回盲部付近の粘膜固有層と下織に虫体（腸結節虫）と菌塊を容れたアブセスや肉芽腫が指摘された。

病理学的診断：以上の所見より本症例は「めん羊の結節性汎動脈炎」と診断された。しかし単に汎動脈炎、結節性動脈周囲炎としても良いと思われる。病変の分布から見れば多発性動脈炎であろう。家畜の動脈炎の原因にはウイルス性、細菌性など明らかなものもあるが、野外症例の多くは原因不明で、特発性の出方をするという。本例も明らかな原因もなく特発したものだが、全身の血管炎病変が比較的慢性経過をとっているのに、フィブリノイド変性という動脈炎の初期変化が鼻甲介にのみ限局して認められた点は興味深い。